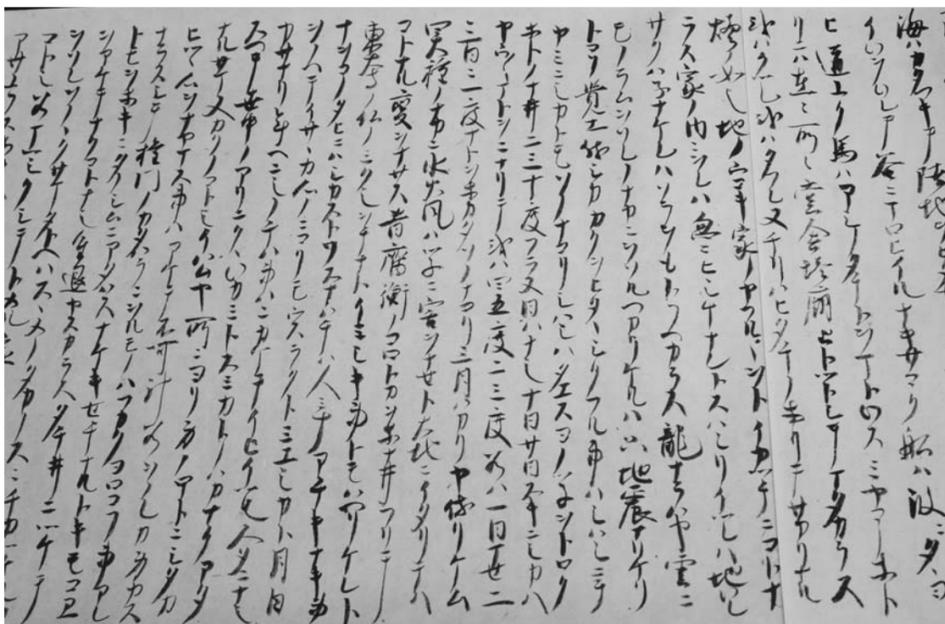


津波防災特集 2021

古典に残る災害の記録

文学で追体験 危機回避に有意



複製日本古典文学館『方丈記』（現存最古の写本・大福光寺本〈京都国立博物館寄託〉の複製）本写真は元暦の大地震を記した箇所。「ハネナケレハソラヲモトフヘカラス...

『方丈記』 鎌倉時代の随筆。著者の鴨長明は京都・鴨御祖神社（下賀茂社）の神職の生まれ。正禰宜（ねぎ）だった父が若くして亡くなり後盾を失った長明は、鴨祐兼・祐頼父子との後継争いに敗れる。河合社禰宜に就く契機が訪れるが成らず、出家して隠遁生活を送った。『方丈記』の書き出し「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」に、長明の仏教的無常観を読み取ることができる。

『平家物語』 軍記物語。作者、成立年ともに未詳だが、現存本で比較的原態を留めていると推測される延慶本の奥書（書写した人の名や写した事情、日付などを本の最後に書いたもの）は鎌倉時代末期成立をうかがわせる（『徒然草』第226段では後鳥羽院時代に成立したとある）。写本・版本は「読み本（読まれることを想定して作られた諸本）」「語り本（琵琶法師語りの台本、またはそれに近い諸本）」の二種に大別される。現在最も読まれているのは語り本の「覚一本」。読み本と比較して、分量は少なめである。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす」と起筆し、平家の栄華と没落を叙述しながら、世の無常を描き出す。

「自分たちが体験していないことを追体験させてくれるところにあると思います。災害によって負の心情に陥った人や私達が決して実行しないような犯罪を行った登場人物などの描写に触れることで、どういった経緯でそうなってしまったのか、どうしたら避けられるのかを考える手がかかります。悩んでいる人の気持ちを察しやすくもなります。かつて人間たちが犯してしまった差別といった過ちがあることを現代の人間に伝え、繰り返さないよう戒めてくれる（こと）もあります」

「建築に携わる方に勧めるのは立



（そうとめ・ただし）1994年東京大学文学部国文学専修課程卒業、2002年同大学大学院人文社会学系研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）。二松学舎大学教授。長崎県出身。専門は日本中世文学。著書に『藤原定家論』（笠間書院、2011年）などがある。

interview

二松学舎大学 文学部国文学科教授

五月女 肇志氏

「災害の記録を残す古典の中で代表的なものは。」「枕草子」（清少納言、1000年）の成立、『徒然草』（兼好法師、鎌倉時代末から南北朝時代にかけて成立）と並ぶ、三天随筆の一つ、『方丈記』（鴨長明、1212年成立）が挙げられます。安元の大火、治承のつじ風、福原遷都、養和の飢饉（ききん）、元暦の大地震の五大災厄など作者・長明が体験した天変地異・社会現象を記しています。」「方丈記」は世の中の人と住居の無常をテーマに、二丈四方（方丈）の草庵生活の素晴らしさを説く作品です。その主張を補強する事例として災害を用いています。数々の災害

の史実を列挙するだけでなく、住居を失って苦しむ人々の心情を精細に写し、読み手に追体験させる仕組みとすることで『住み家は無常だから質素な草庵暮らしが一番安心である』という訴えにつながっています。具体的被害規模・範囲の数値を示すなど事実の伝え方に優れ、災害によって発生した音や被害状況を比喩で表すなど、読み手に災害の状況を想起させる工夫もなされています。鴨長明が現代に生きていたらジャーナリストとして活躍できていたのではないのでしょうか」

「『方丈記』が災害に見舞われた時の人の心情や行動の詳細を描く一方で『平家物語』はそれを踏襲していません。『平家物語』は『方丈記』と比べ被害の規模を大きく記したり災害の発生日時を実際と変えたりしています。作者の意図に基づいて話を展開していくため、軍記物語ではよく見られる手法です」

「『方丈記』では元暦の大地震の余震にも言及するのに対し、『平家物語』では、大地震発生の原因を滅亡したばかりの平家のたたりとし、本震の記述のみにとどまっています。余震は平家のたたりの話題を引き出す上で不要だからです。さらに『平家物語』では、つじ風の発生を史実より1年前にすらしめています。平重盛（平清盛の長男。1138〜1179年）の死に始まる天下争乱の前兆としてつじ風を利用したのです」

「災害の正しい発生日時を残すのは。」「古記録は公家の日記という性質上、著者本人の思い違いでない限りは正確な日時と被害が記されていると考えられます。日記類、朝廷が残した記録、歴史書などを読んで史実を踏まえた上で、古典を読むとそれぞれの作品の特質と意図をうかがい知ることが出来ます。『方丈記』の五大災厄は『百練抄』（公家の日記を抜粋・編さんした日本の歴史書。鎌倉時代末期成立とされる）や『明月記』（平安時代末期から鎌倉時代初期の公家、歌人、藤原定家の日記。1180年から1235年まで記

執筆意図内包する災害記述

『方丈記』に記された五大災厄と同時期に起こった歴史的出来事

Table with 3 columns: 歴史的出来事, 災害(記『方丈記』), 文学的出来事. Rows include events like 1072年(延久4年)白河天皇即位, 1177年(安元3年)大火災発生, 1180年(治承4年)中御門京極あたりで大きなつじ風が起こる, etc.

※立原道造 建築家・詩人。東京帝国大学工学部建築学科卒業。在学中、小住宅の設計で3年連続辰野賞（日本銀行や東京駅丸の内駅舎の設計で知られる建築家・辰野金吾に由来。丹下健三や植文彦、藤本壮介の各氏などが受賞している）受賞。詩人として活動し、中原中也や室生犀星らと交流する。卒業後は石本建築事務所入所。結核性胸膜炎により24歳で死去。